

嗅覚障害について

嗅覚(きゅうかく)とは、においを感じる感覚のことで、におい物質が鼻の中のおいを感じる部位(嗅覚器)を刺激することにより生じます。においが分からなくなったり、本来のにおいと違うように感じることを嗅覚障害といいます。嗅覚障害をおこす原因としては鼻・副鼻腔疾患、感冒(風邪)後が多く、全体の 7 割程度を占めています。その他の原因としては外傷後、神経変性疾患、薬剤性、心因性、加齢性などがあります。

嗅覚障害を起こす鼻・副鼻腔疾患には鼻炎、副鼻腔炎、鼻茸、鼻中隔彎曲(びちゅうかくわんきょく)症などがあります。鼻の周囲には副鼻腔と呼ばれる空洞があり、そこに炎症を起こした状態を副鼻腔炎といいます。副鼻腔炎が持続して慢性化すると、鼻の粘膜が腫れ上がって鼻づまりを起こしたり、膿っぽい鼻水が持続したりします。またこれに伴って鼻の中にポリープ(=鼻茸)を形成して、さらに鼻づまりが治りにくくなることもあります。この結果、鼻の中のおいを感じる部分までにおい物質が到達しなくなって嗅覚障害をおこします。また鼻の真ん中の仕切りである鼻中隔が曲がっていること(=鼻中隔彎曲症)により、鼻がつまったり副鼻腔炎を起こしやすくなって嗅覚障害を起こす人もいます。

感冒(風邪)後ににおいがわからなくなる方も多くいらっしゃいます。これを感冒後嗅覚障害といいます。感冒に伴って起きた鼻炎や副鼻腔炎によってにおいがしにくくなる以外に、においを感じる部分の細胞や神経がウイルスで障害され嗅覚障害を起こすと言われていています。風邪をひいたあと鼻のつまりがとれてもおいがない場合は注意が必要です。



また近年増加しているアルツハイマー病やパーキンソン病などの神経変性疾患では病初期に嗅覚障害を起こすことが知られており、早期診断に役立つと言われていています。また嗅覚は加齢とともに低下し、特に 60 歳から 70 歳から急激に低下すると言われ、加齢も嗅覚障害の原因となることもあります。

嗅覚が低下した状態で長期間経過すると治癒率が下がるとも言われており、早期の診断・治療が必要になります。嗅覚障害の診断・治療のためには、鼻の中の診察がまず必要になるため、ご心配な方は耳鼻科に受診して診察を受けることをお勧めします。



【耳鼻科診療部長 金子 功】

